

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 28 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13165

研究課題名（和文）日本語から見るコントロール現象の意味的普遍性

研究課題名（英文）Semantic Universality of Control Phenomena: A view from Japanese

研究代表者

阿久澤 弘陽（Akuzawa, Koyo）

京都大学・国際高等教育院・講師

研究者番号：30825162

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、生成文法の標準的な理論では説明が困難だった、日本語の時制節（形態的な時制辞が出現する節）におけるコントロール（や繰り上げ）に対して、語彙意味論の観点から分析を試みたものである。具体的には、時制節が統語的・意味的には空であり、実質的には非時制節として振る舞うという従来の分析を退けたうえで、述語の語彙意味を精査することで、時制節であるという帰無仮説を維持したままコントロール（や繰り上げ）現象が説明可能であることを論じ、より単純化した説明体系が構築できることを示した。また、そのことにより、埋め込み節時制の分布を含む関連事実が、主節述語の語彙意味からの帰結として自然に導かれることを論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究が対象としたコントロール（や繰り上げ）構文は、言語形式上ゼロの要素、すなわち、目に見えない言語的要素の解釈を扱っている。コントロール（及び繰り上げ）は、人間言語の背後にある心的メカニズムを明らかにするという目標を掲げる生成文法理論において重要な被説明項の一つである。本研究では、こうした構文の成立に關与する主文述語の語彙的意味を整理・抽出したうえで形式化し、より記述的・概念的に妥当な説明を与えたとともに、当該構文への新たな理論的取り扱いの道筋を示した。

研究成果の概要（英文）：This study attempted to analyze Japanese tense-marked clauses (where a morphological tense marker appears) from a lexical semantics perspective, addressing issues that standard theories of generative grammar have struggled to capture, such as control (and raising) in these clauses. Specifically, it rejected the traditional analysis that tense-marked clauses are syntactically and semantically vacuous, making them non-tensed clauses. Instead, by examining the lexical semantics of main clause predicates, the study argued that control (and raising) phenomena can be explained while maintaining the simplest hypothesis that these are indeed tensed clauses. This approach allows for a more simplified explanatory framework. Additionally, it argued that related facts, including the distribution of embedded tense, can naturally follow from the lexical semantics of main clause predicates.

研究分野：言語学 日本語学 日本語文法 語彙意味論 統語論 生成文法

キーワード：コントロール モダリティ 定形節 時制 空範疇 文末名詞文 繰り上げ 補文時制

1. 研究開始当初の背景

生成文法理論において伝統的にコントロール(control)と呼ばれる現象は、人間言語の心的メカニズムを探るうえで重要な被説明項の一つである。コントロールに関する理論は、英語の観察事実に基づいて構築されることが多かったが、特に2000年代以降、英語とは異なる事実が通言語的に観察・提出されるようになり、標準的なコントロール理論の再検討と新しい説明体系の構築が進んできた。英語には見られないコントロールの例の一つとして、定形節に見られるコントロール(定形コントロール)が挙げられる。英語では、John decides to write a paperのように、非定形節でのみコントロールが認められるが、日本語では「ジョンが[論文を書く]ことを決意した(cf. ジョンは[論文を書き]直した)」のように、定形節(=時制節)でもコントロールが観察される。この観察自体は古くから知られていた(Nakau 1973)が、従来、こうした埋め込み節を実質的には非定形節であると仮定し、英語の非定形節の説明を援用する統語的分析が長らく主流であった(Uchibori 2000、Fujii 2006など)。しかし、この類の統語的分析には経験的・概念的課題があることが知られており(阿久澤 2018)従来分析の援用ではない、より説明的・経験的に妥当な代案が求められていた。特に、定形コントロールは、埋め込み節の定形性だけでなく、主文述語の語彙の意味特性にも依るという見方が通言語的な事実から明らかにされつつあり(Stiebels 2007、Landau 2015など)語彙意味論の観点を取り入れて日本語の定形コントロールを捉え直すことが、生成文法理論内での一つの課題であった。

2. 研究の目的

本研究の主な目的は、日本語に豊富に見られる定形コントロール(特にコト節を取るコントロール)を対象に、中でも、述語に共通して見られる語彙の意味を明らかにすることで、日本語からコントロールの意味の普遍性に迫ることであった。そのことによって、従来統語的分析によって措定的に規定されてきた理論的仮説を余剰なものとして破棄するとともに、定形コントロールに見られる記述的事実を、独立した一般的な法則から捉え直すことを目指した。その他、定形コントロールに密接に関わる構文に関しても意味的観点を取り入れた分析を進め、定形コントロールのみならず、定形性、時制、述語のモーダル的意味に関する新たな知見を得ることも目標として掲げた。

3. 研究の方法

本研究では、語彙分解の手法を取り入れ、コントロール述語の意味的特徴を分析・記述した。具体的には、複数の分類的な意味概念の記述に留まってきたコントロールを引き起こす主文述語の意味を、形式意味論の概念や手法に基づきながらより精緻に記述・形式化した。

4. 研究成果

(1) コト節を取るコントロール述語の意味的特徴の解明:

日本語にはコト節を取る定形コントロール述語が豊富にある。本研究では、まず、コト節を取る述語を現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)を通じて網羅的に調査した。その上で、述語の意味を記述的観点から8つに分類(attemptive [試行], attitudinal [態度], commissive [行為拘束], directive [指示], factive [叙実], implicative [含意], aspectual [アスペクト], dispositional [属性])した。そして、それぞれのカテゴリーを代表する述語の(形式意味論に基づいた)意味分析を行い、コントロール述語に一般に見られる意味的特徴を探った。その結果、コントロール述語に共通して見られるのは、埋め込み節にde se命題Pを要求すること、述語の意味として態度保持者による意志的行為Qを含むこと、PとQの間に因果関係が認められること、の三つの語彙意味的特徴であることを明らかにした。この意味分析は、コントロールの先駆的な意味研究であるChierchia(1989)とFarkas(1988)の知見(コントロール述語はde se態度的特徴を示す/コントロール述語には、態度保持者と埋め込み節事態の間の責任関係[responsibility relation]が観察される)の2つに基づいたものである。したがって、その意味において、上記の分析結果は、コントロールの伝統的な(形式意味論的)意味分析の発展的応用としても捉えられる。

こうした意味分析には、従来統語的分析と比べて経験的・概念的に次の点で優れている。まず、従来統語的分析では、「埋め込み節の述語の時制形式が過去形と非過去形で交替しない場合は非定形節として振る舞う(Tense Alternation Generalization [TAG]; Fujii 2006)」という措定的な規定のもと、定形コントロールという一見異質な観察を、標準的なコントロール理論の枠組み内で捉えようとしていた。しかし、この規定は、独立した根拠を欠いた、あくまでも措定的なものに留まるだけでなく、定形コントロールでありながら一部の意味クラスの述語(具体的には、叙実述語)が過去形と非過去形で交替し得るという例外を抱えていた。本研究では、定形コントロールは述語の語彙意味から自然に導かれるものであると主張することで、こうした統語的な規定が不要であることを示した。これを、

「ジョンが[論文を書く]ことを決意した」を例に素描すると、「論文を書く」のイベント時 t_1 が「決意する」時点 t_2 よりも後行しなければならない ($t_2 < t_1$) という「決意する」の語彙意味の指定によって捉えられるといった具合である。また、TAG の例外である叙実述語の振る舞いについては、例えば「結婚{した/している}ことを後悔する」であれば、「結婚した」の t_1 が「後悔する」時点 t_2 に先行(この場合は過去形と整合的)または「結婚している」の t_1 が t_2 と同時(この場合は非過去形と整合的)であるという時間的制約が語彙的に課されているとすることで無理なく捉えられる。これはつまり、TAG を措定する根拠とされている時制辞の交替は、述語の意味と日本語の相対時制システムから無理なく説明可能であることを意味しており、その点においても、意味的分析がより優れた説明を提供できる。

このように、本研究では、形式意味論分析の知見を取り入れることで、従来の統語的分析と比べてより単純化された理論的説明が可能であることを示した。

(2) 定形繰り上げ構文に対する意味的代案の提出：

コントロールと密接に関わる対比的な現象として「繰り上げ(raising)」がある。定形繰り上げも多数の言語で観察される現象であり、その背後にあるメカニズムの解明が生成文法理論内における一つの課題であった。日本語では、「よくなる」構文(「ジョンが[働く]よくなった」)が定形繰り上げとしての特徴を示すことが指摘されてきた(Uchibori 2000, Fujii 2006)。そしてこれも、定形コントロールの分析と同様に、TAG のような統語的な措定の規定により(実際に「よくなる」構文では、埋め込み節述語の時制形式は常に非過去形であり、過去形にはならない)、一見定形節に見えるが統語的・意味的には非定形節であるという分析がなされてきた。言い換えると、「よくなる」構文では、埋め込み節の主語が主節に A 移動するという一般的な繰り上げの分析で捉えられるということである。これに対して、本研究では、「よくなる」構文の埋め込み節は定形節であり、主語は埋め込み節内に留まったままであるとする非繰り上げ構造を提案した。この非繰り上げ構造は、「よくなる」構文の否定極性表現の認可や間接受身文の振る舞いを観察することで示される。そして、埋め込み節述語が常に非過去形である事実は、「よくなる」の「習慣(habituality)」という語彙意味的特性と、日本語の相対時制システムから導かれると論じた。これを簡単に述べると、次の通りである。「よくなる」は特定の時間枠(time interval) t_1 において埋め込み節事態 P が複数回発生したことを言明する述語である。P のイベント時 t_2 (部分を成す時間枠[subinterval])は時間枠の部分であり、この意味的な全体部分の関係($t_2 < t_1$)と整合的なのは、後行性だけでなく同時性も表すことができる非過去形のみである(過去形はイベント時の評価時に対する厳密な先行関係を表す)。

上記(1)と同じく、「よくなる」の語彙意味を精査することで、TAG のような余剰な統語的規定に依ることなく、埋め込み節述語の時制形式に独立した根拠に基づいた説明を与えることができる点で、従来の統語的分析よりも意味的分析のほうが、より単純化された説明体系を構築できる。

ただし、上記(1)と(2)の分析の一部は、最新の研究(Fujii et al. 2023)によって、統語的な立場から反論を受けている。これはすなわち、コントロールと繰り上げにおける統語的立場と意味的立場の論争は依然続いていることを意味する。今後もより記述的事実の観察の積み重ねと、それを無理なく捉えられる理論の構築及び厳密化が求められる。

(3) 文末名詞文の述語のモーダルの意味の解明：

定形コントロールは、コト節を取る述語に限られない。本研究では、意志を表す文末名詞文(「つもりだ」「気だ」)の語彙意味的分析も行った。具体的には、次の3点を軸に議論を展開した。「つもりだ」と「気だ」には、意味的に同じだが構文形式が異なる所有文形式(「つもりがある」「気がある」)がある。埋め込み節の主語における顕在化の可否・否定辞の出現の可否・時間副詞との共起の可否に基づく、前者の埋め込み節は定形節であるのに対し、後者は非定形節である。したがって、前者は定形コントロールであり、後者は標準理論の枠組みでも説明できるような典型的な非定形節のコントロールである。定形コントロールの「つもりだ」は前述の(1)を満たす意味的特徴を有しており、本研究の意味的分析により捉えることができる。ただし、「つもりだ」の意味にはより複雑な側面もある。「つもりだ」には意志的な用法の他に、伝統的には「思い込み」と呼ばれる信念的な用法がある(吉川・酒井 2003)。こうした事実から、先行研究では、「つもりだ」は「思う」に準ずる思考述語であり、意志的な意味は副次的な産物であるとされてきた。しかし本研究では、「x は P つもりだ」の意味には態度保持者 x の意志的行為が関与しているということを記述的な観察によって示し、「つもりだ」の意味は、x が自身の意志的行為によって P が実現可能だと認識していることを前提としたうえで x による P の認識の言明であると提案した。このことにより、「つもりだ」のモーダルの意味を精緻化し、より記述的に妥当な「つもりだ」の意味を提案した。「気だ」も、単に態度保持者の意志を表すとするだけでは説明できない証拠性(evidentiality)的な意味を含んでおり、そのモーダルの意味はより複雑である。これに対し、本研究では、話者による態度保持者の行為の「観察(大江 2021)」という概念が一つの鍵になることを示し、「気だ」の意味的特徴の精査を行った。

このように、本研究では、定形コントロールと密接に関わる意志を表す文末名詞文の意味的精査も行い、従来の意味記述を発展させるとともに、その精緻化を進めた。ただし、こうした精査によって詳らかとなった意味が、定形コントロールというより大きな視座においてどのように位置づけられるかという点は今後の課題として残されている。

(4) 特異な所有文に見られるコントロールの記述：

本研究では、「価値がある」という特異な所有文（この本は[読む]価値がある）が存在することを示し、これとコントロールの関係性を記述的な観点から論じた。「価値がある」構文は、統語的特徴（意味的目的語と主節主語の解釈が一致する）と意味的な特徴（経験者ニトッテ句と共起する、埋め込み節事態が意志動詞でなければならない）から、形式上は所有文でありながら難易構文としての特徴を持つことを示した。そして、ニトッテ句に立つ経験者と埋め込み節主語の間に照応関係が認められることから、定形コントロール構文の一種であることも示し、ニトッテ句と埋め込み節主語のそれぞれの顕在化の可否を説明するには、順行コントロール、逆行コントロール（Polinsky and Potsdam 2002）、ゼロトピックや普遍量化空範疇による束縛（Hasegawa 1984/85、Epstein 1984）といったコントロールにおける様々な理論的仮定に基づく必要があることを論じた。「価値がある」構文は、埋め込み節が定形節であることから定形コントロールの一種であるが、この構文に見られるコントロールは特異であり、今後、こうした構文を含めた分析をさらに進めていくことが定形コントロールの研究において必須である。

<引用文献>

- 阿久澤弘陽（2018）「コントロール現象の統語的・意味的分析 主文動詞と補文形式の対応関係」, 筑波大学博士論文.
- Chierchia, Gennaro (1989) Anaphora and Attitudes De Se. In R. Bartsch, J. van Benthem, and P. van Emde Boas, eds., *Semantics and contextual expression*, 1-31. Dordrecht: Foris.
- Epstein, Samuel D. (1984) Quantifier-Pro and the LF Representation of PROarb, *Linguistic Inquiry* 15, 499-504.
- Farkas, Donka F. (1988) On Obligatory Control. *Linguistics and Philosophy*, 11-1: 27-58.
- Fujii, Tomohiro (2006) Some Theoretical Issues in Japanese Control. Ph.D. thesis, UMD.
- Fujii, Tomohiro, Hirotaka Ogawa, and Hajime Ono (2023) Tense Alternation Generalization Revisited: A Reply to Akuzawa and Kubota. *Gengo Kenkyu* 164: 111-123.
- Hasegawa, Nobuko (1984-85) On the So-called 'Zero Pronouns' in Japanese, *The Linguistic Review* 4: 289-341.
- Landau, Idan (2015) *A Two-Tiered Theory of Control*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Nakau, Minoru (1973) *Sentential Complementation in Japanese*, Tokyo: Kaitakusha.
- 大江元貴 (2021) 「反復的観察と評価の意味」『日本言語学会第165回大会予稿集』, 304-309.
- Polinsky, Maria and Eric Potsdam (2002) Backward Control, *Linguistic Inquiry* 33: 245-282.
- Stiebels, Barbara. 2007. Towards a Typology of Complement Control. In *ZAS papers in linguistics*, Vol. 47, 1-80.
- Uchibori, Asako (2000) The Syntax of Subjunctive Complements. Ph.D. thesis, UConn.
- 吉川武時・酒井順子 (2003) 「つもり」吉川武時(編)『形式名詞がこれでわかる』, 177-194. 東京: ひつじ書房.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 阿久澤 弘陽	4. 巻 18
2. 論文標題 「つもりだ」の意味的特徴	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語の研究	6. 最初と最後の頁 36～52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20666/nihongonokenkyu.18.1_36	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Yusuke Kubota and Koyo Akuzawa	4. 巻 27
2. 論文標題 A Semantic Analysis of Embedded Tense in Finite Control in Japanese	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	6. 最初と最後の頁 193-207
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Koyo Akuzawa and Yusuke Kubota	4. 巻 160
2. 論文標題 Against Finite Raising (and Against Defective Tense): A Semantic Analysis of -yooni naru in Japanese	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Gengo Kenkyu	6. 最初と最後の頁 249～261
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11435/gengo.160.0_249	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Koyo Akuzawa and Yusuke Kubota	4. 巻 26
2. 論文標題 A semantic analysis of finite control in Japanese	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Online Proceedings of Japanese/Korean Linguistics	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Koyo Akuzawa and Yusuke Kubota	4. 巻 -
2. 論文標題 The lexical semantics of finite control: A view from Japanese	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Natural Language & Linguistic Theory	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s11049-024-09613-9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計9件(うち招待講演 1件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 阿久澤弘陽
2. 発表標題 私は文末名詞文「気だ」を観察する気です。
3. 学会等名 言語学フェス2023
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Naho Orita, Koyo Akuzawa, Yusuke Kubota
2. 発表標題 Inferring attitude verb meanings using sentence-final expressions
3. 学会等名 The 36th Annual Conference on Human Sentence Processing (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 阿久澤弘陽
2. 発表標題 定形繰り上げと定形コントロールの統語と意味
3. 学会等名 第18回応用言語学研究会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 阿久澤弘陽
2. 発表標題 現代日本語における「つもりだ」の意味再考
3. 学会等名 日本語学会2020年度秋季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 窪田悠介、阿久澤弘陽
2. 発表標題 定形コントロールと相対テンス 日本語からの視点
3. 学会等名 Prosody & Grammar Festa 5
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Koyo Akuzawa
2. 発表標題 Syntax and Semantics of Finite Control in Japanese: Focusing on the predicates involving 'tumorii'
3. 学会等名 Workshop on Modality and Related Matters
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Koyo Akuzawa
2. 発表標題 On the clausal structure of finite control in Japanese
3. 学会等名 NINJAL-UHM Linguistics Workshop on Syntax-Semantics Interface, Language Acquisition, and Naturalistic Data Analysis (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yusuke Kubota and Koyo Akuzawa
2. 発表標題 A semantic analysis of embedded tense in finite control in Japanese
3. 学会等名 The 27th Japanese/Korean Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阿久澤弘陽、竹沢幸一
2. 発表標題 二種類の抽象名詞所有文とコントロール現象
3. 学会等名 日本語文法学会第20回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 竹沢幸一、阿久澤弘陽	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 536
3. 書名 言語研究の楽しさと楽しみ	

1. 著者名 阿久澤弘陽	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 289
3. 書名 日本語統語論研究の広がり : 記述と理論の往還	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------